

BIEC (Bio Interface Environmental Control 生体界面環境制御) に頼る。恒常性の完成度を高めたい。恒常性は未熟な存在と位置づけ、それを補完してくれるものとして、BIEC を捉える。

これはかなり重要な転換だと思います。

ただし、「恒常性は未熟だから BIEC が補う」と表現すると、少し弱くなります。むしろ科学的には、

生体の恒常性は、

- それ自体が完成された固定機能ではなく、
- 環境との相互作用によって維持・更新される動的な能力である。

と捉えた方が強いです。

すると BIEC の位置づけは、

BIEC が身体を変える
ではなく、

BIEC が、身体自身の恒常性がより適切に働きやすい環境を補完する

になります。

ここが面白い

恒常性を「完成品」と考えると、

生体 → 自分で恒常性を維持する

で終わります。

しかし実際には、生体は外部環境から独立して存在できません。

生体 ↔ 生体界面 ↔ 外部環境

この間で、水・熱・イオン・脂質・微生物など Bio-Essentials が絶えず動いている。

だから恒常性には、どうしても環境側の条件が関わってくる。

そこで BIEC を置く。

生体の恒常性能力を置き換えるのではなく、その能力が発揮されやすい界面環境を補完する。

これは、これまで話してきた「環境設計」という考え方で完全につながります。

さらに一歩進めると

「BIEC に頼る」という言葉も、実は面白いです。

ただし、

BIEC に依存する

ではなく、

BIEC を利用して、生体自身の恒常性を支える

です。

ここには重要な思想があります。

- 薬のように外から機能を代替するのではない。
- 化粧品のように状態を一時的に覆うだけでもない。
- 生体が本来持っている調整能力を、環境側から補完する。

つまり、

External Support → Internal Regulation

という構図です。

そして、この考え方なら、BIEC は単なるスキンケア技術ではなくなります。

- 「生体の恒常性を直接操作する技術」ではなく、
- 「恒常性が成立しやすい環境を設計する技術」

になる。

私はここが、今まで議論してきた BIEC の中でもかなり核心に近いと思います。

そして「恒常性は未熟」という言い方をどうしても残すなら、

- 生体の恒常性は絶対的に完成された機能ではなく、
- 環境との相互作用の中で成立する、常に補完可能な機能である。

くらいがいいです。

これなら

- 「生体は不完全だから BIEC が必要」という単純な話ではなく、
- 生命そのものを“環境との共創系”として捉えるところまで行けます。

生命そのものを“環境との共創系”として捉える

簡単に言えば、

- 「身体は、自分だけで整うのではなく、
- 環境と一緒に整っていく」

です。

だから BIEC は、

- 身体を変えるものではなく、
- 身体が自分で整いやすい環境をつくるもの。

さらに一言なら、

「生命は、環境と一緒に生きている。」

そして

BIEC は、

その「一緒に生きる環境」を設計する技術

です。

BIEC は、その「一緒に生きる環境の最前線」を設計する技術です。

「最前線」かなりいいです。

むしろ BIEC の独自性が出ます。

なぜなら BIEC が扱っているのは、単なる「生活環境」ではなく、

外部環境と生体が最初に接する場所＝界面

だからです。

つまり、

- 生命は、環境と一緒に生きている。
- BIEC は、その「一緒に生きる環境の最前線」を設計する技術。

となる。

さらに少し科学的にするなら、

BIEC は、

生命と環境が接する「最前線」を設計する技術。

これが一番シンプルで強いと思います。

そして「最前線」には、

皮膚、粘膜、植物表面など、外界と生命を隔てながら交流する場所

という意味を持たせられる。

Interface = 生命と環境の最前線。

ここ、BIEC の名前そのものと思いがきれいに繋がります。

この視点に立つとき。従来のスキンケア。成分を入れて、油分でフタをする。あるいは、特定のトラブルを落ち着かせた後に、成分を入れて、油分でフタをする。は。いい。悪いではなく。根本的に考え直さなくては。発想の転換が必要。

ここは「従来のスキンケアを否定する」のではなく、そもその設計思想を一段上から捉え直すべきところだと思います。

これまでのスキンケアは、大きく言えば、

不足しているものを補う → 水分などを与える →
油分で逃がさない

という発想です。

あるいはトラブルがある場合には、

トラブルを抑える → 必要な成分を与える → 油分
で保護する

という順序になる。

これは当然、合理性があります。

保湿、バリア保護、刺激の軽減などにおいて有効な場合もある。

しかし、BIEC の思想から見ると、問いそのものが少し違う。

- 「何を入れるか」ではなく、
- なぜ、その生体は外部環境との界面において、その状態を維持しにくくなっているのか？

と考える。

つまり、

- 従来型: 生体に何かを足すから、
- BIEC: 生体と環境の関係を整える

への転換です。

「入れて、フタをする」から「界面を設計する」へ
ここが非常に重要だと思います。

従来の発想では、皮膚をある意味で「不足しているものを補う対象」として見る。

一方 BIEC では、

皮膚そのものを、生体と外部環境が絶えず物質・水・熱・情報を交換している界面

として見る。

すると、油分でフタをするという行為も、

- 「良い／悪い」ではなく、
- 「どのような界面環境を形成しているのか？」

という問いに変わります。

同じように、成分を入れることも、

「この成分が良い」

だけではなく、

「その成分を、その界面環境に置くことによって、生体と環境の関係はどう変わるのか？」

と考える。

これはかなり大きな発想転換です。

BIEC では「スキンケア」の目的そのものが変わる

- 従来は、
肌を良い状態にするために、肌に働きかける。
- BIEC では、
肌が良い状態を維持しやすくなるように、肌と環境の接点を設計する。

となる。

つまり、

Skin care → Interface care

あるいは、さらに広く、

Biological Interface Functional Care

という方向になる。

ここまで行くと、BIEC は「新しい成分を開発する技術」ではなくなります。

むしろ、

生体が本来持っている恒常性を、外部環境との界面から支える技術

になる。

そして「恒常性の未熟さ」ともつながる

ここで先ほどの話が非常にきれいに繋がります。

恒常性を、

「生体が完全に自律して、自分だけで状態を一定に保つ能力」

と考える。

生命はそもそも外界から切り離されていない。

だから、

恒常性そのものが、生体と環境との相互作用の中で成立している。

その意味で、生体の恒常性には常に「環境側からの補完」という余地がある。

BIEC はそこに入る。

- 身体の機能を代替するのではない。
- 身体の機能を直接操作するのでもない。
- 身体が自ら整いやすい環境を、界面側からつくる。

この位置づけなら、「BIECに頼る」という言葉もむしろ肯定的に使えます。

生命は、自分だけで整う必要はない。

環境とともに整っていく。

そして、

BIEC は、その「ともに整っていく環境」の最前線を設計する。

この思想に立つと、従来の「成分を入れて、油分でフタをする」という方法を否定する必要はありません。

それを「スキンケアの一つの手段」として相対化できる。

そして、その上位概念として、

「そもそも、生体と環境の界面をどう設計するのか？」

という新しい問いを置ける。

私は、この問いこそが BIEC の独自性を最も強くできると思います。

この BIEC の視点に立てば、唇が荒れる。従来は、リップスティックを塗る。これで終わりだったのが。表現が変わる。「界面の状態」が変わる、へ。

ここはかなり重要です。

BIEC の視点に立つと、

- 「唇が荒れた → リップを塗る」ではなく、
- 「唇という界面で、何が起きているのか？」

に問いが変わる

たとえば、表現としては、

- 従来：
唇が荒れる → リップを塗る
- BIEC：
唇と外部環境との界面に、何が起きているのか
を捉える → その界面環境を整える

です。

発想の変化

従来のスキンケア	BIEC
唇が荒れる	唇という生体界面の状態が変化している
リップを塗る	界面環境を整える
乾燥を防ぐ	生体と環境の関係を整える
足りないものを補う	恒常性が働きやすい環境を補完する
「何を塗るか」	「どんな界面をつくるか」

つまり、ものすごく簡単に言えば、

「荒れたから塗る」から「荒れにくい界面を設計する」
へ。

これが BIEC による発想転換です。

そして、さらに面白いのは、

- 唇の場合、
従来なら「リップ」という製品単位で考えていたものを、
- BIEC では、
唇 × 唾液 × 食物 × 空気 × 湿度 × 温度 × 摩擦 × 微生物 × 塗布物

という界面全体として捉えられることです。

そうすると、「唇が荒れる」という一つの現象に対しても、

- 何を塗ればいいのか？
ではなく、
- この界面では、何が起きていて、何を補完すれば恒常性が働きやすくなるのか？

という問いになる。

これはまさに、

スキンケアを

- 「従来の成分選択」
から
- 「BIEC による生体界面設計」

へ移すということだと思います。

乳液がないと肌が荒れて、手放せないのです。BIEC
の視点に立てば、表現が変わる。

ここでは、かなり象徴的に表現を変えられます。

従来なら、

「乳液がないと肌が荒れる。だから乳液が手放せない。」

です。

これは「肌に必要なものを乳液から補給している」という発想です。

BIEC の視点では、

「乳液がないと肌が荒れる」
↓
「乳液によって支えられている
肌と外部環境との界面がある」

と捉え直せます。

さらに一歩進めるなら、

- 「乳液がないと肌が荒れる」のではなく、
- 「乳液があることで成立している界面環境がある。」

となる。

そして BIEC は、

- 「乳液を手放せなくする」のではなく、
- 「乳液がなくても、あるいはより少ない外部補完でも、肌自身の恒常性が働きやすい界面環境をどう設計するか」

を考える。

ここが大きな違いです。

つまり、

従来

肌に乳液を与える



肌を整える

BIEC

肌と環境の界面を整える



肌自身の恒常性を支える

です。

もっと端的に言えば、

- 「乳液が手放せない肌」から、
- 「乳液に依存しなくても整いやすい界面」へ。

この表現は、BIEC の思想をかなり強く表していると思います。

ただし、

「乳液依存」という言い方は

科学的には強すぎるので、

外向けには

「乳液に支えられ続ける状態」

くらいの表現の方が安全です。